

2018年3月
1137号

万葉

Manyoh

一冊の会 編集部

〒160-0015 東京都新宿区大京町5
(一冊の会研究室)

伊勢桃代先生を一冊の会最高顧問にお迎えして

～櫻華塾を拡大し記念講演～

伊勢桃代先生は国連本部研修部部長、国連大学初代事務局長としてご活躍され、国連の歩みと共に歩んでこられました。そんな伊勢先生を最高顧問にお迎えすることが出来たことは大変名誉であり喜ばしいことです。喜びに沸く一冊の会メンバーは、皆々先生のお話しをお聞きしたく、桜のつぼみが膨らみ始めた3月17日、櫻華塾第53期を拡大する形で記念講演会を、憲政記念館会議室に於いて開催いたしました。定員100名のところ、どうしても先生のお声を、お姿を直接拝聴・拝見したい人々が詰めかけ、126名近くの人々が集まりました。

開会に先立ち、新井さんが会場後方で国連のTシャツを販売しており、UN Women、UNHCRと共同で支援しているシリア難民の緊急支援に役立てる為であることを説明。高木美智代厚生労働副大臣からのメッセージを上ノ町さんが、神本美恵子参議院議員からのメッセージを鳥飼さんが読み上げ、司会の小山副会長の「一冊の会第2章、第53期拡大3月度櫻華塾開会」の宣言で始まりました。

親善大使・広報親善大使任命

すでに一冊の会親善大使として活躍されているドン・アルマスのお二人に、石田理事長から労いと感謝を込め、改めて日付は平成28年付けの任命書を授与。続いて最高顧問の左近充先生から広報親善大使に平間さん、鬼童さん、佐藤さんに任命書が授与されました。



一冊の会・国連の流れと共に53年

一冊の会は国連の流れと共に歩んでおります。一冊の会の歴史、信念と活動を、今年の1月に研究員に任命されたばかりの若手3人が発表いたしました。

識字と復興祈念樹について (赤田研究員) 一冊の会の原点の活動の1つである本の読み聞かせ、そして「私が読んで楽しかった本、あなたにも読んで欲しい本」のキャッチフレーズをかかげた献本活動について説明し、阪神・淡路大震災、新潟県中越地震、東日本大震災でも単に物だけでなく心の糧になればと物資と共に献本活動を続けてたことを紹介。また、たいへん成長が早い桐であり、一冊の会の永久最高顧問である相馬雪香先生のお名前を冠した「雪香プロスパーポローニア」を、復興が早く進むようにとの願いを込め、東日本大震災での津波の被災地全ての市町村に植樹することを目指していること、福島のことを決して風化させてはならないと決意を述べました。

IT担当として (山内研究員) 一冊の会発足から53年間、会報誌の万葉・ニュースレーダー等の発刊を継続してきたこと、2007年より配信してきた「赤松良子世界インターネット配信」を、10年を区切りに現在はYouTubeでも配信していることを紹介。メールやFacebook、ホームページなどのインターネットの各種媒体でも活動内容を広めており、広報の中心者は鬼童さん、YouTube以外は山内が担当していると挨拶しました。東日本大震災の被災地支援活動は延べ120回目を迎え、自身もこれまで10回程参画してきたこと、7年目を迎えた先週3月11日福島県相馬市の追悼式典に参加し、福島県相馬市と宮城県山元町に支援物資をお届けしたことを報告。現地では未だ皆様の壮絶なご経験のお話を伺い、お会いする度、胸が痛くなること、これからも国連の新しい目標の2030に向けた「誰も置き去りにしない」との誓いを忘れず、支援活動を継続していくことを誓いました。

一冊の会と人権 (城杉研究員) 2018年は世界人権宣言から70周年。1960年頃奴隷解放から植民地解放、独立と続く歴史の中で、大槻会長は人権問題を考え自分で出来ることは何かと社会貢献活動を始め、1975年、国際婦人年には第一回世界女性会議に大槻会長が参加。79年国際児童年では図書館の輪読活動をさらに拡大して、86年国際平和年には相談役であった国立国会図書館元副館長の酒井悌文学博士の平和討論会を各地で開催する等、常に国連の流れにそって53年間活動をして参りましたことを紹介。今年は初の女性参政権が行使された衆議院議員選挙当時の女性の証言集として発行した「1946.410 初の女性参政権行使と日本女性自立への出発」を再度編纂して出版することに挑戦。特に1999

年に引き続きクオータ制の実現を目指し、何故クオータ制なのかの討論の輪を広げる活動をして参ります。女性も男性も其々の特質を活かして活躍出来る社会の実現に向けて活動をしていくことを宣言しました。

馬居副理事長挨拶

通称ブルーの本、「1946.410 初の女性参政権行使と日本女性自立への^{たびだち}出発」の作成をきっかけに一冊の会にスカウトされました、と懐かしそうに語られ、副理事長に就任したことをご挨拶されました。

大槻会長挨拶

本日は、皆さん伊勢桃代先生のお話を聞きたいと、遠くからも会員が集まり、アメリカからも駆けつけた方がいらっしやると紹介され、「伊勢桃代先生は一冊の会にとって40年間幻の人でした。その後共に戦う使命の人」と紹介されました。故酒井悌^{やすし}先生が「ミス・モモヨ」は素晴らしい先駆者だとおっしゃり、1970年には「彼女はやり遂げたよ」と語っていた、その「ミス・モモヨ」が「伊勢桃代」であったと頭の中で繋がったのは、先生が1992年にお亡くなりになってから。今日、この日を迎えたことは感慨深いとおっしゃいました。特にこの原稿は酒井先生の奥様と打ち合わせをしてご披露したとの事。一冊の会は「見てみよう聞いてこよう語り合おうよ友好の輪、10人の友人作り」をモットーに活動を始め、今日まで継続してきた活動の灯を絶やさず精進して行って欲しいと、全国から集まった会員に向けエールを送られました。

伊勢桃代先生講演

お待ちかねの伊勢先生の講演です！以下、お話しを一部抜粋して掲載します。

世界中で、難民が増えている現状があり、1日とて平和な日々を送っていない人々がいる。その経験は恨みとなり、次の時代に禍根を残す。日本は人口が減っている現状があり、難民の子供は増えているという状況に憂う。国連と言う所は、各国政府の代表の集まりであるが、どれだけ国が国家として機能しているだろうか。国連憲章は「われら連合国の人民は」で始まる。いつか、ここに書かれている方向に行くように我々は努力しなくてはならない。

世界共通の目標「持続可能な開発目標 (SDGs)」について本日資料が配布されましたが、この17項目はどれも重要なもの。実現に向けて全てのステークホルダーが連携することが重要。

20世紀は特別な世紀だと思います。産業革命と植民地制度の終わりがあり、社会変革に意欲があった時代。若い人には20世紀をしっかり勉強してもらいたい。教育問題は日本の大きな問題です。暗記、議論をさせない教育はダメです。日本には男性文化が根付いている、それが今行き詰りにきたのではないかと。家長制度も変わっていくだろう。

最後に「戦争中母と父で意見が違った、両方の意見が聞けたことがよかった」と懐かしむお顔で語られました。母親が美術館などに連れて行ってくれたことが「日本が好き」という気持ちを育ててくれた、国際機関において自国の文化をきちんと背負っていることが大事だと語られました。質疑応答は大勢の聴衆が手を挙げましたが、時間の関係でお2人の質問とさせていただきます。

親善大使及び広報親善大使演奏

本日広報親善大使に任命された佐藤玉美さんとご友人の丸山さんが、親善大使ドン・アルマスの伴奏で「早春賦」を歌唱。次に「およげ！たいやきくん」を皆で合唱。最後にドン・アルマスの素晴らしい演奏で締めくくりました。



石田理事長挨拶

今日、この会場である憲政記念館は憲政の功労者である尾崎行雄を記念して、尾崎行雄記念財団によって建設し、衆議院に寄贈されたものです。尾崎行雄は常に世界的視野を持ち世界情勢に敏感で、日本が世界の為になにができるか、国民や政治家が社会、国、世界になにができるかを問い続けました。本館の碑文にも刻まれている「人生の本舞台は常に将来にあり」は、尾崎が満74歳の時に三重を遊説中に高熱で倒れた時に思い浮かんだ言葉です。今まで生きていた事は次の本舞台に向けての練習である、辛いことも悲しいことも迷いも失敗も、全て明日のために糧にしようという非常に前向きで素晴らしい言葉。前年に妻を亡くし高熱に倒れた状況で何故こんなに力強い言葉が思い浮かんだか、それは民権闘争を70年世のため人のためという思いで戦い抜いたからです。尾崎の三女である相馬雪香もまた、尾崎行雄の精神そのままに「出来る事から始める」のモットーで行動した人でした。一冊の会も一人一人が世のため人の



のためという考えを持っている会。その思いで活動しなければなりません。今日の伊勢先生のお話を聞いて、ただ良いお話を聞きました、だけではダメです。我々が明日から何に活かすか。今から考え始めなければなりません。

そのように聴衆に問いかけてから、いつも皆の先頭に立ってくださっている大槻会長と小山副会長に感謝を述べ、今日から伊勢先生も仲間となったこれからの50年を歩んでいく出発としましょう、と聴衆に呼びかけられました。

石田理事長のおっしゃるとおり、今日を新たな出発とし伊勢先生と共に歩んでまいりましょう！

文責：赤田研究員